

## 新刊紹介

東徹著

## 『精神科病院で人生を終えるということ—その死に誰が寄り添うか』

(日経BP、2017年)

森山 花鈴

本書は、精神科単科病院の身体合併症病棟で勤務する精神科医である筆者が日経メディカルOnline（医療関係者向けのウェブサイト）で執筆したコラムをまとめたものである。

帯には「死は希望だ—一介の若手精神科医の独白」とあり、少しドキリとするが、内容は実際の症例（エピソード）を中心とした読みやすいもので、精神疾患を有する患者（特に終末期）と向き合う医師の葛藤が記されたものとなっている。

内容は、主に「序章」（第1話～第13話）と「終章」の2章からなり、最後に「特別編」として、書き下ろしの形で相模原障害者施設殺傷事件について触れられている。

序章では、長期入院の高齢者が多いという精神科の身体合併症病棟に関する説明から始まり、13話にわたって、これまで筆者が経験した亡くなった人の事例を報告している（内容はプライバシーに配慮して改変済とのこと）。

認知機能が低下した場合の終末期医療について、自殺企図のある患者へのがん告知、終末を迎える場所をどうするのか、最期に寄り添う人について…現実の症例を元にしたエピソードは、改変されているとはいえ、具体性があり、現場が抱える現実を強く示している。そして「食べられなくなった時が寿命なのか」という問いや「元気な時の意志が衰えた時も同じとは限らない」という筆者の言葉は、精神疾患を持つ患者や関わる関係者に限らず、我々が終末期に抱える問題でもある。

読む際には、ある程度の精神疾患に関する知識があった方が読み進めやすくはあるが、帯に「精神医療の入門としても最適な1冊」とあるように、本書では普段、関係者でなければ触れることのできない精神医療の現状についてわかりやすく記されているため、精神医療について詳しくは知らないという方にも一読を勧めたい。